



依屋 宗達 毛利家本西行物語絵巻断簡

Ginza Curator's Room

007 吉岡 洋

うつしの美学

今回の『Ginza Curator's Room』では、美学者で京都芸術大学文明哲学研究所教授の吉岡洋氏をお迎えして「うつしの美学」展を開催いたします。

現代や過去における古作品の模写をはじめ、文明の始原から写され続けてきた波文を伝える唐紙の制作、さらには人間の声に宿る生命を機械合成によって生成するコンピュータ音楽の試みを、「うつし」というキーワードを手がかりに考えます。

会期初日の4月18日には、キュレーターと出展作家によるオープニングトークを開催いたします。

ご予約は不要ですので、ぜひご来場ください。

詳細はGinza Curator's Room サイトからもご覧いただけます。

<https://gcr.shibunkaku.co.jp/exhibition/007/>

Artists

雪舟 等楊 俵屋 宗達 村上 華岳 小林 玉雨 フォルマント兄弟 河合 早苗
（「フィシスの波文」プロデューサー）

思文閣銀座

2024.4.18 Thu. — 5.2 Thu.（日祝休廊）

10:00 — 18:00

オープニングトーク

日程 2024.4.18 Thu. 13:00~15:00

会場 東京大学本郷地区キャンパス 法文2号館 教員談話室

登壇者 吉岡 洋 小林 玉雨 フォルマント兄弟 河合 早苗 吉田 寛（美学会会長）

協賛 美学会

Curator's Statement

うつしの美学

吉岡 洋

「うつし」は、コピーではない。

コピーとは、出来上がった形をトレースしたりスキャンしたりして再現することである。形は似ていても、その形を生み出した動きや変化のパターンと、その形をトレースしたりスキャンしたりする動作のパターンの間には、なんの関係もない。だがそのことはコピーにおいては問題にならない。コピーにとって重要なのは、オリジナルの形を再現する精度だけだからである。

それに対して「うつし」においては、形を生み出す動きや変化のパターンを、ひとつの身体から別の身体へと移すことが目指される。結果としての形が似ていることも重要でないわけではないが、その再現の精度を上げることが最終目標ではない。動きや変化のパターンは固定することができないので、うつす過程においてそれら自体が揺らぎ、うつろう。うつすことは時間を受け入れることであり、常に変質や衰退と身を接しながら行われる。

現代の私たちはコピーという考え方に支配されており、うつすことにまつわる感性や想像力が衰えている。コピーはその内部に生成原理がコード化されていないので、同一のものの反復や保存には適している。それは変質や衰退からは護られている反面、発展や進化の可能性には開かれていない。発展や進化には変異が、あえて言うならエラーが必要である。それは時間の中での不安定性を受け入れること、変化を受け入れつつ継承することである。「うつし」とは両義的であり、生を抱きつつ死に臨むことであると同時に、死を抱きつつ生を求めることでもある。

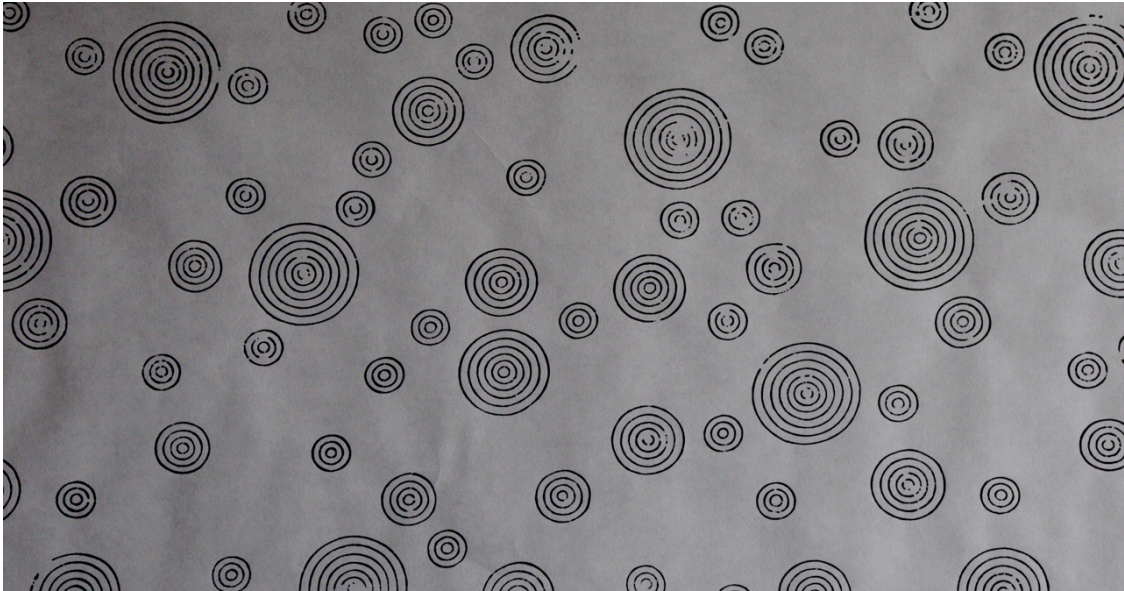
本展示では、現代や過去における古作品の模写をはじめ、文明の始原から写され続けてきた波文を伝える唐紙の制作、さらには人間の声に宿る生命を機械合成によって生成するコンピュータ音楽の試みを、「うつし」というキーワードによって考えてみたい。

Curator

吉岡 洋

1956年京都生。情報科学芸術大学院大学（IAMAS）教授、京都大学教授を経て、現在京都芸術大学文明哲学研究所教授。『情報と生命』（新曜社）『〈思想〉の現在形』（講談社）他、美学芸術学、情報文化論に関わる著作・翻訳など多数。批評誌『ダイアテキスト』（京都芸術センター）編集長、「京都ビエンナーレ2003」「岐阜おおがきビエンナーレ2006」総合ディレクター。映像インスタレーション「BEACON」プロジェクトメンバー。ロームシアター京都リサーチプログラムメンバー。日本学術会議会員。





『フィシスの波文』より「唐長文様 細渦」(c) 2023 SASSO CO.,LTD.

思文閣銀座

〒104-0061 東京都中央区銀座5丁目3番12号 壹番館ビルディング

<https://gcr.shibunkaku.co.jp/access/>

TEL: [03-3289-0001](tel:03-3289-0001)

営業時間: 10:00 — 18:00

日祝休廊

本企画に関するお問い合わせはtokyo@shibunkaku.co.jpまでお願いいたします。

SHIBUNKAKU
GINZA

思文閣